

戦前期日本における元冠遺跡の政治利用について

ボルジギン プレンサイン

人間文化学部国際コミュニケーション学科

はじめに

日本各地には鎌倉時代に侵略してきた「蒙古襲来」—「元冠」の歴史的遺跡が多数残されている。これらの遺跡は、日本初の外敵侵攻の歴史的記憶、そして日本モンゴル関係史における最初の出来事として存在してきた。千年近くの間、これらの遺跡は日本と大陸との歴史的動きにあわせながらそれぞれの時代に人々の注目を浴びてきた。

日露戦争以降、日本は「満蒙」と呼ばれる、現在の中国東北三省と内モンゴル自治区の東部地域を自らの特殊な利益圏と認識して大挙進出した。1931年の満洲事変を経て、傀儡の満洲国(1932)を樹立したうえ、現在の内モンゴル自治区中西部地域にも進出し、傀儡の蒙疆政権(1937)を樹立した。それにより、万里の長城より東北部と内モンゴルの東部、中西部を支配下におき、終戦まで植民地支配した。清朝生誕の地—満洲やモンゴル人居地域を大東亜戦略の重要な一部として位置づけ、有効な支配を行うために、13世紀にユーラシア大陸を一世風靡したチンギス・ハーンや彼がうちたてたモンゴル帝国の遺産から利用可能な要素を探り出した。その一つが元冠遺跡である。本来、元冠遺跡は日本に攻め込んできた外敵の脅威の象徴として位置づけられてきたが、今度は日本が大陸へ進出するという政治的背景のもとで斬新な政治的意味合いをもたせる必要性があった。小稿では、20世紀前半期における日本の満蒙進出のなかで、これらの元冠遺跡がどのように大東亜戦略の特殊な時代に利用されたかについて、その一端を検討するものである。

一、元冠遺跡の分布

まず、戦前期の政治利用に関わる元冠関連遺跡の分布状況について簡単に紹介しておきたい。元冠遺跡がもっとも集中しているのは福岡県の博多湾周辺地域である。そのなかでも代表的なのは福岡市東区大字の志賀島にある蒙古塚である。蒙古塚は文永・弘安の役(1274・1281年)で戦死したモンゴル軍兵士を供養するため、昭和2(1928)年に日蓮宗の提

唱によって建設されたものであり、もともとは北側の丘陵上にあったようだが、平成17年の福岡県西方沖地震によって倒壊し、平成19年に現在地に再興したものである。博多湾周辺にはほかにも蒙古襲来に備えて建てられた元冠堡塁の遺跡が多く残されているが、戦前期においてもっとも多く触れられたのが蒙古塚である。

このほか、海を挟んで志賀島の対面にある糸島半島(福岡市西区西浦)西浦岬灯台の近くに「蒙古山」という山があり、ここは元軍の戦死者が埋葬されたといわれる場所である。山頂には明治28(1895)年に建てられた「蒙古山之碑」があったが、平成17年の福岡西方沖地震で倒壊し、2021年11月に日本モンゴル国交樹立50周年を記念して「九州沖縄・モンゴル友好協会」と福岡在住のモンゴル国名誉領事シーテヴェ アルタン氏らが共同で建て直された。

元軍が上陸した九州北部地域よりはるか遠く離れた仙台市宮城区燕沢二丁目の善応寺にも「蒙古之碑」という石碑が建っている。「燕沢碑」とも呼ばれるこの石碑は鎌倉時代の1282年の建てられたとされる。もともとは近くにあった安養寺の門前に立っていたようであり、安養寺の廃寺に伴い昭和に入ってこの地に移されたという。この碑はそもそも1282(弘安5)年の第二次元冠侵攻の翌年、中国から帰化した宋無学祖元が弟子清俊に命じて弘安の役で標没した元軍兵士を供養してつくられた碑といわれている。後述するように、昭和16(1941)年に蒙疆—蒙古聯合自治政府主席の徳王が訪れたところである。

そのほかに、鎌倉の常立寺にも「元使塚」と呼ばれる五輪塔がある。それは1275(建治元年)年に元の使者である杜世忠ら5人が処刑された場所で大正14(1925)年に建てられた供養塚であり、やはり日本が大陸へ拡張しつづけた時代に建てられたというところが興味深い。戦前期にモンゴル関係者が訪れた痕跡はないが、2005年4月7日に、横網の朝青龍や白鵬らモンゴル国出身の幕内・十両力士らが元使塚を参拝し、それ以降毎年、藤沢で巡業の際に

モンゴル国出身の力士による元使塚参拝が行われるようになった。さらに、2007年には、モンゴル国のエンフバヤル大統領が訪日の際にここを訪れた。接待にあたった永倉代務住職はモンゴル国の大統領一行に対して「閣下の参拝により七百三十有余年に及び供養をいたし守り続けてきた歴代住職方の元使墓所護持の労苦も報いられたことと存じます。未来永劫に元使の霊を供養し弔い続けるために精進を重ねて参ります」と述べ、ツォルモン大統領夫人からは元使塚供養のために感謝の布施として八百ドルが供えられたたようである¹。このように、21世紀に入ってから元冠遺跡は日本とモンゴル国の親善交流の一つの接点となり、訪れるモンゴル人がかけた青い色のハダクが江の島の入り口にあるこの古刹を鮮やかに飾るのが印象的である。

二、徳王関連記念碑

満洲事変以降、日本は満洲国の建国によって東部内モンゴル三盟²とフルンボイル(呼倫貝爾)地域を満洲国領内に取り込んだ。それにつづいて、1937年に内モンゴルの中西部地域で蒙疆政権を建て、終戦まで現在の内モンゴル自治区の大半を支配した。満洲国は「日満漢蒙鮮」といった五つの民族による「五族協和」を唱え、日本の支配下における民族融和政策を進めた。また、蒙疆政権においては、チンギス・ハーンの第30代子孫といわれる徳王(テムチュクドンロブ)を首脳とし、モンゴル人への融合政策を進めた。こうした日本による内モンゴル統治のなかで必然的に利用される歴史的資源がチンギス・ハーンおよびモンゴル帝国の存在である。徳王と蒙疆政権については、内モンゴル近現代史や日中関係史において多くの研究が蓄積されており、徳王と日本の関係についても色々と微妙なところがあったようだが、徳王は昭和1938年10月と1941年2月に二回ほど日本を訪問している。「図1」と「図2」で示すように、上記元冠遺跡のうち、福岡市志賀島の蒙古塚と仙台市善応寺の「蒙古之碑」にそれぞれ徳王が参拝したことを記念する石碑が残されている。確かに、第二回訪日の際、つまり1941年10月26日に徳王一行は東京の上野駅から電車に乗って仙台へ行き、善応寺の「蒙古之碑」を参拝したが、福岡志賀島の蒙古塚を訪問したという記録は管見の限り見当たらない。「図1」のように、志賀島蒙古塚の北側丘陵上には「徳王閣下御手植の松」という



図1 福岡市志賀島蒙古塚の上段山腹にある徳王関連記念碑



図2 仙台市善応寺にある徳王関連記念碑

石碑と並んで「蒙古徳王閣下寄進 金三百圓也」という石碑が建てられている。しかし、平成17年の福岡西方沖の地震によって倒壊し、平成19年に南側下段に再建される際、移動されずもとの場所に残された。一方、後述するように、同じ場所に建てられていたはずの「興安南省東科後旗長包尼雅巴斯爾一行参拝」の石碑や張作霖による「蒙古軍供養塔賛」は新しい場所に移設されて現在に至る。筆者が2022年2月に訪れた際は、丘陵に上がる鉄の扉も

閉ざされていて、新設の南側下段だけ訪れた場合は徳王関連の石碑が見られない状態である。福岡市から建てられた蒙古塚(蒙古軍供養塔)の案内には、「昭和13(1938)年に蒙古聯盟自治政府の指導者である徳王も参拝され」と書かれているが、徳王の訪日関連日程にはそのようなスケジュールは確認できていない。

徳王と一緒に訪日した蒙疆政権のナンバー2にあたる李守信の回想³によると、第一回訪日の際、徳王は福岡県の糸島半島にある蒙古山を訪れ、行く先々に元寇という文字を見せられて嫌気がさし、次に訪れる予定であった「小島」はキャンセルするようにいったと書かれている。ここでいう小島とはおそらく志賀島を指しているであろう。李守信の回想録の信憑性には疑問点もあるが、一つの情報として記しておきたい。

蒙古塚における徳王関連の石碑は果たして徳王本人が参拝して建てたものか、それとも徳王訪日の際、関係者によって代理で建てられたものなのか、引き続き検証する必要がある。

一方、「図2」の仙台善応寺には「古道猶存」と「徳王御手植えの松 昭和十六年二月十六日」と書かれた徳王関連の石碑が二つある。また、「古道猶存」という石碑の裏側には「昭和十六年二月二十六日蒙古連盟自治政府主席徳穆楚克棟魯布閣下親しく蒙古に礼拝す〇〇 永く記念するため茲〇碑〇〇 昭和十九年五月一日 燕澤小鶴岩切有志一同」と書かれている。今回の徳王の参拝について、同年に「二月二十六日蒙古聯合自治政府主席徳王が燕澤碑を視察するために仙臺に来た。(中略)是より先、昨年の夏蒙古政府要路の某々氏から徳主席燕澤碑視察の實現に就いて内々斡旋を依頼された時から、私は碑の有つ意義を明かにしておかなければならなかつた。(中略)碑の移轉と供養の設備は岩切村と善應寺が擔當してくれられた。(後略)」⁴という記述が小倉博によって記されており、訪問の際、徳王は仙台で講演会も行っていたようである⁵。上記小倉の記述からも、この「蒙古之碑」参拝は、訪日を準備する段階から徳王側が希望した日程であることが伺われ、モンゴルの再興を夢見ていた徳王はどこかでモンゴル帝国の栄光を懐かしんでいたことであろう。一方、日本人がかつての敵国の兵をこうして丁重に弔っていたことに徳王は感激したはずとする解釈もあるが、どちらかといえばそれは戦後の

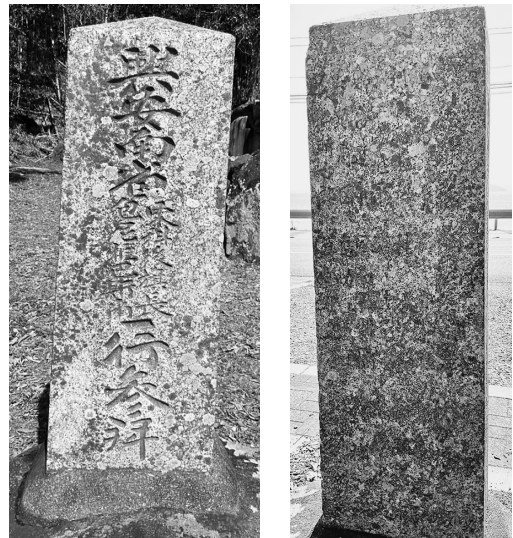


図3 志賀島の蒙古塚にある石碑「興安南省東科後旗長包尼雅巴斯爾一行参拝」の表と裏

人々の思いであろう。

三、東科後旗(ホルチン左翼後旗)一行の参拝碑

満洲国領内のモンゴル人居住地域は概ね興安南省、興安西省、興安東省と興安北省の四つの地域に分類されたが、そのうち興安南省はジリム盟各旗、興安西省はジョーオド盟各旗、興安東省は大興安嶺山脈以東のソロン人やダウール人居住地域、興安北省は大興安嶺西部のバルガ八旗が中心であった。満洲国期のジリム盟ホルチン左翼後旗は「東科後旗」と呼ばれることが多い。当旗は吉林省と遼寧省に隣接し、農耕化したモンゴル人が密集した東部内モンゴルの重要なモンゴル人居住地域であった。福岡市志賀島の蒙古塚には、このホルチン左翼後旗の旗長ポニヤバザル(包尼雅巴斯爾)をはじめとする一行が訪れた際に建てた石碑がある。「図3」で示すように、石碑の裏側には旗長以外の遂行員の名前が刻まれているが、表と違って、刻字は粗末で、かなり読み難い。ポニヤバザル旗長一行の訪日についてはまだはっきりとした記録は見つかっていないが、以下、石碑の裏表に刻まれている文字を復元したうえで、そこに刻まれている人名のうち、現段階で確認できた三名について紹介したい。まず、石碑の表は次のようになっている。

東科後旗長

- ① 興安南省 一行参拝
包尼雅巴斯爾 福岡県観光係建碑施

裏側に刻まれている文字は以下の通りである。

昭和十六年四月廿三日参拝記念

- 右上 巴雅斯古郎 暴勒爾因 那倫達賚 薩音巴雅爾 額徳和喜格 紹布多
那順徳勒格 孟和
右中 莫日太 烏力吉因 温克巴雅爾 好爾勞 扎木蘇 亦拉 額爾徳尼陶克因呼
右下 藩樹辺 大塚 克 巴雅扎布 来喜達弘 敖力格色楞 道楞嘎

以上廿三名

包尼雅巴斯爾(ボニヤバザル)：

光緒24(1898)年にホルチン左翼後旗生まれ。漢語名は包世賢。中華民国12(1923)年に奉天省立第三中学校を卒業し、旗ジャサク衙門でモンゴル語と漢語の通訳を務め、その後内・外モンゴル各地を6年間周遊するが、そのなかで内モンゴル人民革命党に参加した。満洲事変以降、内モンゴル自治区軍に参加し、総司令部中校参謀となり、軍法処副処長を兼任した。大同元(1932)年8月から興安南省民政庁事務官、興安南省公署勸業科長を歴任し、康德3(1936)年からホルチン左翼後旗旗長に昇任した後、康德8(1941)年から興安南省民政庁長に就任した。彼は「皇帝訪日記念章」を授与されていることから、1941年4月には確かに訪日し、おそらく帰国後まもなく興安南省民政庁長に昇任したと思われる。ボニヤバザルは1943年から1944年までホルチン左翼後旗の旗長に再任する。戦後、ボニヤバザルは内モンゴル人民革命党の活動を復活したが内モンゴル人民革命党は解党され、国共内戦の混乱で故郷に戻った。中華人民共和国建国後の1954年に、ジリム盟政治協商会議の副主席に任命された。文化大革命中には迫害を受け、1969年に73歳で他界した。

額爾徳尼陶克因呼(エルデニトクトフ)：

光緒25(1899)年にホルチン左翼後旗生まれ。訪日当時はホルチン左翼後旗公署の文書股長を務めていた。

紹布多：

ホルチン左翼後旗生まれ。奉天蒙文学堂を卒業し、民国初年ころに、ボグド・ハーン政権の軍事衙門で参領をつとめていたという。

中国で清朝と中華民国が交替する1911年ころ、内モンゴルから多くのモンゴル人がハルハ・モンゴル(外モンゴル)に赴き、独立運動に参加した。そのなかでも漢人の入植と開墾に長く苦しんできたジリム盟、ジョスト盟のモンゴル人が多く参加したことはよく知られている。ジリム盟のなかでも、遼寧省と吉林省に隣接するホルチン左翼後旗とホルチン左翼前旗から多くのモンゴル人が外モンゴルの独立運動に参加した。史料調査はまだ十分ではないが、蒙古塚を参拝したホルチン左翼後旗の上記三名のうち、二人が外モンゴルの独立運動に何らかの形で加わった経歴があり、それがソ連とモンゴル人民共和国からの「赤化」を警戒する満洲国における彼らの立場を危うくしていたことも容易に考えられる。逆に、そうした背景をもつことが彼らの日本に対する積極的なアピールにつながったのではないかと思われる。

四、張作霖の「蒙古軍供養塔賛」

志賀島の蒙古塚には奉天軍閥の長として長く東北満洲の覇権を握って来た張作霖の「蒙古軍供養塔賛」がある。張作霖は清末から中華民国期にかけて東北満洲で長く活躍し、1920年代には中華民国北洋政権の実権を掌握して、1928年6月4日に日本軍によって爆殺された人物である。張作霖が活躍した時代はまさに日露戦争に勝利した後の日本が満蒙へ進出していた時代と重なるのである。日本とはときに協力し、ときに緊張関係にあった張作霖には訪日した経歴がなく、日本の満蒙進出の障害とみなされたことにより、日本によって抹殺されたのである。

蒙古塚にある「蒙古供養塔」は昭和2(1927)年5月15日に日蓮宗高僧鍋日統の提唱によって建てられたものである。碑文の文字は当時の田中儀一首相によるものだが、裏側に書かれている田中儀一首相の肩書は「陸軍大将男爵」と書かれており、ほかに「元帥海軍大将 東郷平八郎」の名前も並んでいる。張作霖による「蒙古軍供養塔賛」はこの際に建てられたものと考えられる。一体どのような経緯で



図4 蒙古塚にある張作霖の「蒙古軍供養塔賛」

本文(上段)

大日本志賀島蒙古塚供養塔讚

卓哉大慈氏法身遍塵界普囑四天天下作一家族視 親

大日本志賀島蒙古軍供養塔讚

卓哉大慈氏法身遍塵界普囑四天天下作一家族視
 冤親奚足論平等無差別何意忽必烈渡海興雄師
 被誡諸健兒荒原血長碧博多大海灣往往鬪饑哭
 迄今六百載遺塚多湮滅大德高鍋師至仁被幽顯
 改建此浮圖冥魂獲依託並藉信仰誠廣造和平福
 俾亞細亞州蒸為太和宇我知大師意請為宣其蘊
 欲謀大和平首除人我相衆生執我有究竟我安在
 如彼虛空雲須澌滅四大本皆空何論一枯骸
 枯骸亦虛空敵我何畦吟以此大智慧宏拯諸鬼趣
 無我無敵人一切皆度脫推此悲愍心普及於東亞
 為謀和平故開顯無上法煌煌法華文塔畔森布列
 宏闡日蓮宗天人盡歡喜此塔不可毀此願無終訖
 我今作此讚雨淚霑胸臆願以此因緣消滅脩羅劫
 中日同種族文教通沉滯庶體釋尊慈左右長提掣
 順逆證一如回向於佛道前路共蕃榮寶祚永無替
 中華民國東三省保安總司令張作霖書

張作霖の祝辞碑がここに建てられたのかについて管見の限り確かな情報は見当たらない。しかし、供養塔が建てられた昭和2年当時、福岡県の知事や福岡市長に加えて旧清朝の関係者や満蒙で長く活動していた大陸浪人の川島浪速も参加し、「参加を予定していたハラチン王も急病を理由に参加を取りやめた」⁶という説もある。もしこうした人物が関わっていたとするなら、日本政府の意向が背景にあった

としても彼らが具体的に操作した可能性があるが、いずれも更なる検証が必要である。「蒙古軍供養塔賛」が建てられた三ヶ月後の6月4日に、その張作霖も日本軍によって爆殺され、その責任を取る形で田中内閣も総辞職した。

おわりに

満蒙進出は日本の近現代史の主旋律であった大東亜戦略の重要な部分を占める。また、アジアの盟主を目指した大東亜戦略には13世紀にユーラシア大陸の大半を征服し、ヨーロッパに脅威を与えたモンゴル帝国の遺産がもっとも利用価値のある政治的遺産として見られた。13世紀の蒙古襲来時から活躍し、その後長きにわたって元冠遺跡を供養し、管理してきた日蓮宗は、戦前期にも政府と軍部に元冠遺跡の現代的価値を認識させ、その働きによって関連地域で元冠遺跡に新たな命を吹き込み、復元した。今日人々が目にする元冠遺跡のほとんどはこの時期に再建したものである。戦後になると、内モンゴルは政治的主体性を失い、満蒙という地域概念すらなくなって、戦前期の雰囲気にあわせて再建された各地の元冠遺跡は長くその影を潜めた。しかし、1972年に日本とモンゴル国⁷が国交を結んでから、特にモンゴルに対する日本のODA支援が活発化する1980年代後半からモンゴル政府関係者の訪日も頻繁になり、元冠遺跡は日本とモンゴル国との親善関係の重要な接点となっていった。1980年代初期から長崎県の鷹島周辺の高底に沈んだモンゴル軍の船舶の遺物を引き上げてつくられた「松浦市立埋蔵文化財センター」には、1988年10月18日にモンゴル国の駐日大使ボヤントイン・ダシツレン一行が訪れて「二十一世紀に夢を託し、後世に今を伝えるため元冠カプセルを埋設」した。上述のように、その後モンゴル国の三代目大統領のエンフバヤル氏が鎌倉の常立寺を訪れるなど、今は独立国家としてのモンゴル国が元冠遺跡の政治的継承人となっている。

※本稿は、2018年度-2023年度JSPS科研費「『満洲』・モンゴル社会の再編と戦後の中国社会」(「国際共同研究強化(B)」、課題番号:18KK001、代表:ボルジギン プレンサイン)の助成を受けて行った研究成果の一部である。

注

- 1 『日蓮宗新聞』2007年3月10日号
- 2 東部内モンゴル三盟とは清朝時代からつづいたジリム(哲里木)盟(現在の通遼市)、ジョーオド(昭烏達)盟(現在の赤峰市)と現在その大半が遼寧省に含まれるジョスト(卓斯図)盟を指している。
- 3 劉映元整理(1985)『李守信自述』内蒙古文史資料 第二十輯、pp304-305
- 4 小倉博「燕澤碑に蒙古徳王を迎へて」『仙臺郷土研究』11(3), 1941, pp.14-16.
- 5 「日蒙親善講演会(会館彙報)」『(斎藤報恩会)時報』(171), p.12.
- 6 <http://www.bekkoame.ne.jp/~gensei/ten/sikaland.html>
- 7 1992年までは「モンゴル人民共和国」。

参考文献

- 青旗社調査室資料班編(1942)『満洲国蒙系紳士録』
青旗社
- イリナ(2004)「徳王の訪日と日本の内モンゴル政策について」『国際文化論集』第31号(桃山学院大学総合研究所)、pp67-104
- ガンバガナ(2016)『日本の対内モンゴル政策の研究—内モンゴル自治運動と日本外交1922-1945』、
青山社
- 興安総署調査科(1933)『蒙古人名録』
- 札奇斯琴(1987)『我所知道的徳王和当時の内蒙古』
上、下 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
- ドムチョクドンロブ 著 森久男 訳(1994)『徳王自伝—モンゴル再興の夢と挫折』岩波書店